

トピックス

1. 播州日誌「ウクライナの悲劇」
2. 南国土佐を後にして 第2回



福留経営労務管理事務所
姫路龍馬会
社会保険労務士・行政書士
福留章

龍馬通信

No. 52

2022年4月号

春なのに 清明～穀雨の候

陽光が水辺に映えてさらさらと流れる小川。
春が来た。コロナ禍に呻吟する人々が待ち望んだ春が来た。花々は色鮮やかに咲き乱れ、吹く風は優しく頬をなでていく。桜前線は北上を始め、雪解け水の流れは人々の心を和ませる。

コロナ感染拡大も一息ついた感じ。病床使用率も50%を大きく下回っている。春が来た。別離と出会いの季節、喜びも悲しみも大きな希望となって青空に溶ける。春が来た。そんな春なのにこの憂鬱はなんだろう。日本から8,193 km離れた遠い国。ウクライナに2月24日ロシアが侵攻した。今日現在、その戦火は止むことがなく、むしろ激しき増している。数百万人の人々が国外に逃れ、避難所生活を強いられている。強制連行の話も聞く。数千人も数万人もと言われる犠牲者。情報が錯綜し、はっきりとした数字はわからない。毎日のように報道される戦況はいずれにしても深刻なものであり、好転する兆しは今のところない。春なのにこの憂鬱は何だろう。母と子が抱き合っただけ涙するシーンが頭から離れない。春なのに、春なのに、本当の春はまだ遠い。

清明 4月5日 穀雨 4月20日



『龍馬と私』 ～ お龍のその後 ～

高知県立坂本龍馬記念館発行の「龍馬書簡集」の中に一通だけ妻お龍にあてた手紙が掲載されている。筆まめな龍馬、坂本乙女宛の手紙が最も多いが、妻宛もかなりの数があったものと思われる。

下関に居たお龍宛の手紙は長いもので前半は慶応3年(1867年)4月に瀬戸内海で発生したいろは丸衝突沈没事件で紀州藩の賠償支払いが決まったこと(薩摩藩取りなしによると言われている。)を伝え、後半では事件解決後、長崎で出発を待つ土佐藩の夕顔で後藤象二郎と上京するが、「この上京は誠に楽しみ」とさりげなく書いている。この航海こそ、いわゆる「船中八策」の原案をもって乗船する龍馬のやっと訪れた新しい日本の設計図発表への期待が行間ににじみ出ている。下関に寄れぬ事をあやまり、次の機会には必ず必ず長崎への帰途、ちょっとでも帰るのでお待ちくださいと書いている。さりげない文章だがお龍への信頼と愛情を感じる一節である。慶応3年(1867年)11月15日刺客に襲われ闘死。お龍は12月2日下関、自



榎崎 龍

然堂にて訃報に接する。この時お龍 27 歳。龍馬生前の依頼を受けた長州の三吉慎蔵が預かり明治元年（1868 年）3 月に土佐の坂本家に送り届けた。お龍は同年 4 月安芸郡和食村にある妹、君枝の夫、菅野覚兵衛の実家に移り、翌 2 年夏、土佐を去る。その時多くの手紙が浜辺で焼かれたということが、後昭和 16 年になって高知新聞に報じられた。土佐を去ったお龍は一時、妹の君江の夫、千屋寅之助の実家に身を寄せ、明治 8 年（1875 年、お龍 35 歳）西村松兵衛と再婚し、横須賀に住んだが後、離婚。その晩年は決して恵まれたものではなかった。「私は龍馬の妻だった。」が口癖であったらしい。墓は同市大津町の信楽寺にあり、「贈正四位坂本龍馬之妻龍子之墓」と刻まれている。

播州日誌

「 連続記録 更新中 」



昨年 12 月 25 日から毎朝のウォーキングの連続記録を順調に更新している。4 月 4 日、事務所報の 4 月号が皆様に届く頃には連続 100 日を達成することになる。朝 5 時過ぎに起床して準備をし、5 時 45 分頃にスタートする。春分を過ぎてすっかり夜明けが早くなり、もう灯の必要はない。一方通行の側道を西へ歩いて天川の土手に突き当たる。堤の上で定位置に立って柔軟体操を 7 種類ぐらい。中で深呼吸を 6 回。冬の間はまわりが暗闇になる分、きれいな星を仰

ぎ見ることができる。流星も何度か見た。体操後、すぐ近くの天川の橋を渡る。途中、中央あたりで無反動で右手・右足・腰を伸ばす運動、呼吸を止めて 15 秒ぐらい。左右 3 回ずつを 6 セット。次に膝の屈伸運動を 10 回。最後に右足を後ろに蹴り上げてお尻に当たるようにする。左右 30 回。橋を渡って南方向へしばらく歩く。この土手上の距離が最も長いのでこの間、ぶつぶつと毎日決まった呪文のようなものを唱える。たいしたことは言っていないが、まずは自分の名前にありがとう。父母への感謝、家族への感謝。お客様への感謝。最後に事務員さんへの感謝。他にもいろいろとぶつぶつ言うが、一番大切にしているのは「大いなる力」。つまり「大宇宙の生命」のようなものの存在を認め、帰依すること。従って正しい道へ導いてくれることを祈ることにしている。亡くなった父母や兄弟の名前をあげて追悼



し、生存の者の名前をあげて、今日の平穏を祈る。天川歩道橋を渡って天川東公園に入る。遊歩道を半周して、円形の花壇のあるコーナーに入る。ここで 4 回に分けて深呼吸を 14 回、かかと落としを 10 回、前立腺を鍛えるために肛門をしめる運動 10 回、円形サークルをまわりながらウィリー歩き、後ろ歩き、30cm 程の高さのベンチの上がり降り 20 回。反動をつけて片足ずつ、足・腰を伸ばす運動。ゴルフスイングを 30 回、最後斜め腕立て伏せを 50 回。これがメニュー一覧。真冬でもうっすらと汗をかく。これからの季節はかなりの汗をかく。歩く距離は 2km 程度。行き交う人との挨拶や新幹線の上り一番列車を見送る楽しみもある。それぞれの季節によって同じコースでもいろいろな景色を見ることができる。



私は健康の源がこの毎朝のウォーキングだと思っている。まもなく連続 100 日の記録を達成するが、少々の雨や風なら耐えて記録に挑戦するつもり。朝 5 時頃。一番に起きて何かと世話をして送り出してくれる家内には頭が下がる。家内の為にもずっと健康でいたいと思っている。

2022. 3. 27

「 ウクライナの悲劇 」

2022 年 2 月 24 日。ロシアは満を持してウクライナに侵攻した。砲撃による建物の崩壊とともに戦後の

国際秩序も崩壊した。世界は20世紀に2度にわたる大戦の惨禍を経て、19世紀型の「政治の延長としての戦争」の禁止と大国が小国の運命を決める大国主義と訣別したはずではなかったか。

国連憲章にある「武力による現状変更を禁止する」という平和への誓いが、いとも簡単に破られた。1カ月を過ぎててもその戦火は止むことがなく、毎日のように報じられているウクライナの現状は血と涙と悲しみを深く大きくするばかりで、停戦どころか、生物・化学兵器を使用や戦術核兵器の使用を示唆するなど混迷を拡大し続けている。独裁者の狂気、プーチンの戦争と断じるだけでいいのだろうか。

歴史に学んだ世界は、民主主義と専制主義の二者択一ではなく、主権を尊重し、その国の内政に干渉せず、平和への希望を共有し、共存共栄の道を歩まねばならなかったはず。ウクライナが中立からNATOへ大きく舵を切り始めた時、この戦争の勃発が必然となった。銃をつきつけている人と銃をつきつけられている人、そして多くの人がそれを傍観している。悲しみのトライアングル。私たちはただ遠い国の争いごととして傍観していてよいのだろうか。北朝鮮や中国の動向は微妙に変化するだろう。今回のウクライナ侵攻が長引けば長引く程、日本の危機は大きくなる。本当の安全保障とはどうあるべきか。エネルギー大国のロシアに依存する欧州の国は多い。その最たるものがドイツの天然ガスのパイプラインによる輸入だ。21世紀の今、こんな侵攻が現実にかかるということが想定外だったと言って済まされるものではない。ウクライナの侵攻は現状の国連や安全保障理事会が全く無力であることを白日の下にさらした。機能不全に陥った機構の改革が絶対に必要だと思う。世界の危機は益々拡大の方向を向いている。一人の人間として何をなすべきか何百万人とも言われるウクライナ難民救済の為、募金ぐらいしかできない自分の無力さを痛感する。他人事ではなく、本当に一日も早い停戦の実現を祈る。

2022. 3. 28

～南国土佐を後にして～

第2回 「神戸編」

神戸市内とは言え、長田区は文字通りの下町であり猥雑な感じが強く印象に残っている。高知に移住して高校生の時、友人と神戸を訪れたことがあり、元自転車屋をしていた家に行ってみたことがあった。何もかもが小さくて狭くてよくこんな所に、家族8人住んでいたなと思ったが、考えてみれば年とともに自分が大きく成長しており、当時はその狭さが実感できなかったのだろうと得心した。神戸に住んでいた頃、近く的美容室の夫婦に赤ちゃんができて少し大きくなった時、お父さんが市電の運転手をしていたことから時々、誘われて夜の電車に乗せてもらった。赤ちゃんが主役で私はダシのようなもの。のんびりした時代で今ならとても考えられないが、同じ職場の人同士は顔パスで運転席に乗り込むことができるのである。年に1度、花電車の運行があり今から考えればお粗末な電飾ではあったが、何も娯楽のない時代であるが故に今でも鮮明な記憶として残っている。どこの家も似たり寄ったりではあったが、戦後の貧しさは子供心に張り付くようにして残っている。「米がない。」ということが時々あった。父は中々の人で小切手を先付けで発行し、米屋に渡す。しかも金額を多めに書いてお釣りをもらう。現金は別の支出に使う。なんともあきれてしまうような話だ。家風呂がある方が少数派で殆どの方は週に何度か近くの銭湯へ行った。結構な込み具合で浴槽に入るのにちょっと時間をズラさなければならない程。まずかかり湯をしてからといったルールがあり、皆、大体ルールを守って行儀よく入浴していた。銭湯の入口付近に番台があって、そこに経営者の家族が座って入湯料の徴収など全体を監理していた。何十円だか、もう記憶にないが客が



